

Chapter 1

酪農を通じた
食やしごと、いのちの学び





幼児

自信と達成感につながる 幼稚園児の酪農体験

東京都新宿区立鶴巻幼稚園年中・年長／榎本牧場（埼玉県）

「お肉になる」話を受けとめた園児

鶴巻幼稚園の年中（4歳児）年長（5歳児）の園児が、榎本牧場（埼玉県）で2回の酪農体験をしました。1回目に牧場を訪れた時、酪農家の榎本さんが「牧場で生まれた雄牛は2歳、雌牛もミルクが出なくなる6歳くらいでお肉になる」という話をされました。「園児には少し早いか」と担任は感じました。しかし、聞いた以上はこの話を中途半端に終わらせることはできないと思い、体験後、園児がどのように感じたのか話し合う「お話し会」を開きました。

牧場に行くまでは、食べ物にのちがあると思っていなかった子どもが多く、そのことに触れると涙ぐむ園児もいました。年長の子どもたちは、雌牛がお肉になる年齢が6歳頃と聞いて自分の年齢と重ね合わせていました。「牛に生まれなくてよかった」と正直な感想を述べる園児もいました。ほとんどの園児が、お肉になるということは乳牛のいのちをいただくことだと理解したようで、残さず大切に食べる気持ちにつながっていききました。後日、ある男の子が「昨日、夕飯がステーキだった。牛さんのいのちに感謝して食べたよ」と嬉しそうに担任に報告してくれました。後で母親から聞くと「食べる前はぼろぼろ泣いていました。家族も泣きながらステーキを食べましたが、かわいそうだから食べないのではなく、いのちに感謝して残さず食べるという結論に至った」そうです。園児たちの中で、牧場で見た乳牛とスーパーの牛肉がどこまでつながったのかはわかりません。ただ「生き物を食べて生きている」ことや、「いのちをいただいている」ことを知るのには、年中や年長でも決して早くないとい、園児たちの反応からわかりました。

子牛の出産で誰のためのミルクかを理解

2回目になると、園児らは積極的に牧場に行きたがる

たことが、2回目にはできるようになりました。この時期の園児にとって、できないことができるようになることが大きな自信と達成感につながることで



1回目の体験前(上)体験後(下)の乳牛の絵



体験後、園でお話し会

前向きで意欲的な態度に変化

酪農体験を2回実施したことは、園児に大きな成長をもたらしました。「牛舎に入ることができなかった」「えさやりが怖くてできなかった」「先生に抱かれていないと乳牛に触れなかった」など1回目はできなかったこと、さらに子牛の出産に立ち会ったことで、「ミルクは誰のためのもの？」という榎本さんの質問に、「子牛のため」という園児の答えがスムーズにつながりました。「子牛を生んでお母さん牛はミルクを出すけれど、それは子牛のためのもので人間はそれを分けてもらっている」という榎本さんの話を、より現実的に受けとめることができました。

「怖くて触れなかった乳牛が2回目は平気になった。私にはできる、すごい」と自己肯定感が高まりました。自ら成長したことを園児自身が実感し、心も満たされたことで、「3回目も行きたい」「もっとやりたい、もっとできる」と前向きで意欲的な態度に変化しました。今まで遠い存在だった乳牛をより身近に捉えることができるようになりました。もし、できないままだったとしたら、乳牛は近寄りたがい存在で終わってしまっ

たかもしれません。



「雄牛は2歳でお肉になるんだよ」と語る榎本さん

18頭の乳牛が子どもたちの心を変えた！

山口県周南市立和田小学校1年生／藤井牧場（山口県）

*担任の藤井幸司氏の文章を原案にしています。

仲良くなるために、 乳牛の気持ちを思いやる

夏休みも終わり2学期になったある日、和田小学校1年生の教室で飼っていた金魚が全部死んでしまいました。子どもたちに聞くと、輪番制になっていた飼育当番をみんな忘れていたということでした。「めんどうくさい」「忘れてしまう」「きたない」「おながすいたって

言ってくればよかったのに。理由を聞くけど、次々に自分本意なことを並べ立てました。「どうしたら生き物を大切に

心が育つのだろう」と担任の藤井先生は悩みました。そんな時、ふと思い出したのが、春の遠足で訪れた藤井牧場のことでした。初めて見る乳牛に逃げ腰になりながらも、子どもたちは乳牛に夢中になっていました。乳牛と関わった時間はわずかでしたが、「牛ってかわいいね」「もっどいたいよ」「先生、また来たいな」と話していました。乳牛は大型動物であるがゆえに、世話が大変です。友達同士で協力しなくては飼育活動ができません。自分の好きに動かそうとしても、到底思い通りにはなりません。だからこそ、乳牛の気持ちを思いやって関わっていくことが必要になります。

藤井先生は、「牧場を学習の舞台にできないだろうか」と考え、事前に藤井牧場の了解を得た上で、子どもたちにたずねてみました。「藤井牧場で乳牛の世話をしてみたい？」子どもたちの心は揺れ動きました。しかし、春の遠足での牧場体験が予想以上に子どもたちの心に残っていたようで、「みんなで力を合わせてお世話するからや

りたい」と前向きな答えが返って来ました。藤井牧場の藤井さんご夫妻は、最初は「牧場が教育の場になるの？」と不安そうでした。それでも牧場を学習の場とすることを快く承諾してくださいました。それだけではなく、子どもたちはひとり1頭ずつ世話をする乳牛を与えてもらえることになりました。

10月に入り、子どもたちは久しぶりに藤井牧場の乳牛たちに再会しました。喜び勇んで牛舎に向った子どもたちは裏腹に、乳牛たちの態度はそっけないものでした。「ウシさんにあいにいきました。でもわたしのいうことをぜんぜんきいてくれません。大きくてこわかったです。ぜんぜんさわれませんでした。」（A子）

「もう行きたくないって言うかな」と藤井先生は思いました。学校に帰って聞いたところ、子どもたちの答えは予想に反するものでした。「牛だっってぼくたちを見てびっくりにしたんだ。牛と仲良くなる方法を調べてみたい」。子どもたちは絵本や図鑑を使って調べたり、牧場に直接行って藤井さんに聞き取り調査をしました。「牛と仲良し大作戦」と名付け、自分たちが調べたり、考えたりしたことを実行に移していきました。二回、三回と牧場を訪ね乳牛たちと関わっていく中で、乳牛への見方や関わり方が変化していきました。

「いつものようにえさをあげました。ぼくのウシさんはおながすいていたみたいで、むしやむしやたべました。たべおわったらぼくにむかってにっこりウシさんがわらいました。」（B男）

乳搾りで変化、牛乳を飲み干す

「ぼくたちが給食で飲んでいる牛乳は、藤井牧場の牛さんのおちちだっ！」

ある朝、教室に行く子どもたちが嬉しそうに話していました。「ぼくもちちしぼりをやってみようか」「牧場のおじさんをお願いしてみようか」と口々に言いました。搾乳は、早朝と夕方2回と時間が限定されていて、それ以外の時間は乳牛の体調に影響が出るためはじめは藤井



乳牛と仲良くなるためにできることから始める



藤井さんに質問して問題を解決する



藤井さんの心を動かし、念願の乳搾り体験



創作の「ウシさんの歌」で藤井さんご夫妻に感謝の気持ちを伝える

興味・関心が持続し、 最後まで主体的に関わる

瞬く間に半年が過ぎ、楽しかった牧場での学習も終わりを迎えました。半年間、子どもたちの興味・関心が最後まで持続し主体的に学習に関わっていたのは、牧場での体験活動が多く疑問や発見を投げかけ続けてくれたからだだと思います。「牛が寄ってきてくれないう」という現実が、「仲良くなるにはどうしたらいいだろう」という問題意識につながりました。牛舎の掃除や餌やり、乳搾り、出産見学など乳牛と深く関わることで生き物を慈しむ気持ちにつながっていきました。

教室をふと見回すと、後ろのロッカーの上から小鳥の鳴き声が聞こえて来ます。3学期から飼いだめたジュウシマツの「ポッポ」と「ビジョン」の声です。今、4個の卵を生んでいて、子どもたちは新たないのちの誕生を今か今かと心待ちにしています。

子どもたちは1年前と比べ、確実に変わりました。そしてその変化は子どもたちだけではなく、お世話になった藤井さんご夫妻の感想からも伺えました。「いのちを育む酪農の新しい可能性を発見すると同時に、子どもたちと一緒に酪農を見直す中で、一番変わったのは私たち自身なのかもしれません。酪農は乳牛を育てるだけでなく、自然との共生を教える役割を担っていることを実感しました。」



小学校低学年

母牛と子牛の別れが、いのちの深い気付きにつながる

東京都新宿区立東戸山小学校1年生／吉田牧場（埼玉県）

酪農家の吉田さんから乳牛の話聞きながら諸感覚をたっぷり使い体験を行う中、東戸山小学校の子どもの心に響く印象的なシーンがありました。それは、生まれた子牛が母牛と一緒にいる牛舎の前に来たときでした。「明日の今頃は、子牛は母牛と離される。子牛は母牛と1日しか一緒に暮らせない」と吉田さんから聞かれました。吉田さんの何気ない話は、母親の存在が絶対的なこの時期の子どもたちにかなりショックを与えたようでした。「もし自分が1日で母親と離れることになったらどうしよう？」と自分と子牛を重ね合わせ、「耐えられない！」という感情がわき起こりました。

担任の福井先生がこのシーンをちょうびビデオで撮影していたので、翌日、すぐに道德の授業でビデオを視聴し、子どもたちに感情を言葉で表現させました。すると、子どもたちの表現が、体験前と明らかに変化していました。体験前の乳牛に対してのイメージは、「モーと鳴く動物」など単純な表現しかありませんでした。しかし体験後は、「乳牛の赤ちゃんは1日で離される。母牛は毎日牛乳を搾る大切なお仕事があるから子牛と離されると吉田さんは言ったけど、毎日のお仕事が終わったら子牛に会わせてもらえるの？」など、知っていることや知りたいことの言葉が増え感情を伴う表現に変わってきました。

学習面だけではなく、生活面でも変化が見られ、給食の残さが減ったり、友達との関わりでもお互いがお互いの気持ちを思い合えるようになりました。乳牛の大きさやあたたかさ、大きな体から排泄される大量の糞や尿など、大人の目線では普通に思えることも子どもにとってはすべてが感動体験です。その感動が言葉となって溢れ出し、体験でできたことやわかったことが自信や意欲につながったと福井先生は感じています。吉田牧場の体験に同行した早稲田大学教職大学院教授の田中博之氏も、「吉田さんから母子分離の話聞いたことで、日頃飲んでいる牛乳は動物の悲しみの上にあることを知り、いのちの深い気付きにつながった」と語りました。

小垣江東小学校は平成12年の「総合的な学習の時間」の開始を受け、地域にある清水牧場と連携し、毎年4年生が「子牛の飼育」を行っています。学校では、担任が変わると同じテーマで授業を続けるのは難しい状況の中、今まで継続している理由を校長の柴田先生にお聞きしました。

17年間継続、小学校で子牛を飼育

愛知県刈谷市立小垣江東小学校4年生／清水牧場（愛知県）

「小垣江東小学校に赴任して感じたことは、『子牛の飼育』が学校の風土として根付いているということでした。風土が根付くには理由があります。それは指導する先生方が、『いのちの大切さを育む』という目的に沿ってカリキュラムを毎年少しずつ見直し、学習を積み重ねているからだと思います。それと今まで継続できたことの一番の要因は、何と言っても清水さんの全面的な協力です。いのちの大切さを学ぶきっかけになればと、毎年快く応じてくださっています。しかも学校で飼育した子牛が牧場に戻ってからも子どもたちが会いに来られるようにと、すぐに出荷される雄牛ではなく雌牛を貸し出していただきます。清水さんの惜しみない協力があってこ

して感じたことは、『子牛の飼育』が学校の風土として根付いているということでした。風土が根付くには理由があります。それは指導する先生方が、『いのちの大切さを育む』という目的に沿ってカリキュラムを毎年少しずつ見直し、学習を積み重ねているからだと思います。それと今まで継続できたことの一番の要因は、何と言っても清水さんの全面的な協力です。いのちの大切さを学ぶきっかけになればと、毎年快く応じてくださっています。しかも学校で飼育した子牛が牧場に戻ってからも子どもたちが会いに来られるようにと、すぐに出荷される雄牛ではなく雌牛を貸し出していただきます。清水さんの惜しみない協力があってこ

その実践であり、清水さんには感謝の気持ちでいっぱいです。

柴田先生は赴任前、小垣江東小学校は、「子牛とホテルの学校」だと聞いていました。3年生がホテル、4年生が子牛を飼育し、いのちを重層的に学びます。柴田先生は子牛を世話する子どもがつぶやいた、「いのちってあたたかいんだね」という言葉が忘れられないそうです。いのちに触れ、いのちと向き合ったからこそ発した心からの言葉に、いのちの学びの手応えを感じています。

子牛を世話することで気持ちが癒されたのは、担任の明松先生も同じでした。子牛の人懐っこさに心があたたくくなったそうです。

「国語で戦争や原爆などのいのちに関わるテーマを学習したとき、子どもたちは子牛を育てた経験と重ね合わせ、自分の言葉でいのちを語るようになりました。登場人物の気持ちに寄り添って、深い思考で捉えようとしていました。2ヶ月間の子牛の飼育体験は子どもたちにとって、いのちの価値観となる土台が形成される貴重な体験になったことは間違いありません。」

それを裏付けるように保護者も理解を示し、4年生になった当初から「子牛の飼育」のスタートを心待ちにしているということです。



子牛の入学式で挨拶をする清水さん



子牛の入学を歓迎する子どもたち



慣れた手つきで子牛にブラッシング



放牧場で元気に遊ぶ子牛

「種子島の酪農」の学習を通して、 子どもたちが紡いだかけがえのない言葉

鹿児島県中種子町立野間小学校5年生/鮫島牧場（鹿児島県）

稲作に次ぐ農業に 酪農を位置付ける

鹿児島県の小学校教師である白尾先生はこれまで、ほとんどの赴任先で地域にある第一次産業をテーマとし子どもたちと学習に取り組んできました。小学校教師でありながら、「社会科教師」と自負している白尾先生にとって、第一次産業は優れた社会科の教材です。なぜなら第一次産業の学習を通じて「人どもの」「人と人」というまさに社会の関係を学んでいけるからで、そこに大きな魅力を感じています。

種子島の野間小学校に赴任して3年目、5年生の担任になった白尾先生は、子どもたちに身近な「種子島の牛乳」をテーマに全17時間、酪農について学ぶ授業計画を立てました。4ヶ月前から教材研究を始め、種子島の酪農について酪農家や牛乳工場に聞き取り調査を行いました。年度始めになり、校長先生に授業計画を提出したところすぐに了解を得ることができ、社会科で稲作を学習した後に酪農の学習をスタートすることにしました。

互いの考えを認め合い学びが深まる

授業では、牧場と牛乳工場の仕事を一連の流れで知ることと牛乳生産の過程について学んだ上で、酪農家戸数の減少問題を取り上げ、子どもたちの問題意識を広げました。最終的には子どもたちに芽生えた問題意識を「酪

をまとめ、お互いの考え方を共有しながら学びを深めていきました。授業が進むにつれ、白尾先生が感心するような表現も多く出るようになりました。その中でも特に、酪農の本質に迫る意見が交換されたのが、「乳牛は最後は肉になる」という事実に直面したときでした。それはY君の、「年をとってきた牛は使えなくなり処分される」という発言に端を発しました。これについてS君は、「いろんな生き物のいのちをもらっている。これから牛乳を買ったら残さず飲みたい」と発言しました。S君の考えには、多くの子どもたちが理解を示しましたが、ただひとりMさんは異なった意見でクラスに疑問を投げかけました。「牛は使えなくなったら処分されると言うけど、それまで必要とされてなかったように聞こえる。鮫島さんは牛を一生懸命に世話すると言われていたことから、酪農家にはまず『牛は必要』であり、牛はおいしい牛乳や肉を作るためにがんばっている。だから処分されるとは意味がちがう」という意見でした。Mさんの考えは、酪農家の仕事の価値を乳牛の世話に見出そうとするものでした。ただ、表現こそしなかったものの、その視点には他の子どもも気付いていました。そのためMさんの発言をきっかけに、「いのちをいただくことに感謝」「おいしいお肉が食べられるのは酪農家のおかげ」という表現が

農家が減少しないためにはどうすればよいか」という対策を考えることにつなげ、ひとりひとりの考え方が導き出せるように学習を進めました。

学習の中盤では、酪農家の鮫島さんにも学校に来てもらい、生乳の生産過程や経営の工夫、酪農家の現状などについて授業をしてもらいました。子どもたちは鮫島さんから得た知識やさまざまな情報を手掛かりに考え加わり、学びが深まりました。それはMさんも同様で、「最後は肉になる」事実を「酪農家の牛への愛」と表現しました。

酪農体験で締めくくり共感や理解を深める

地域の第一次産業を子どもたちと学ぶとき白尾先生が大事にしていることは、学習の始めに必ず作物の生産過程と流通過程を学び、知識を得るようになることです。なぜならそれらを学ぶ過程で、自ずと生産者の思いや願いに触れるからです。酪農の場合も、生乳生産への努力を続ける酪農家の姿を通して、子どもたちは酪農を理解していききました。その理解はやがて仕事の大変さや酪農家の苦労や工夫につながり、「感謝」「感動」「愛」など情緒的な表現に変わっていききました。白尾先生はそれこそ子どもたちが紡いだ本物の言葉と感じ、子どもたちの心にかけてがえのない言葉として息づいていくことを確信しています。

さらに、今回の実践では学習の最後に鮫島さんの牧場に行き、ブラッシングや餌やり、子牛の心音確認などさまざまな体験をしました。牧場での実体験は今まで得てきた知識とつながり、酪農家への共感や理解を深めようとする自発的な態度が育まれていきました。



自分の考えを発表する



クラスメイトで話し合い



酪農家の鮫島さんから授業を受ける



餌のにおいをかく



子牛の心音を聞く



すずきはるかより

いのちがだいじ
いのちがだいじ
いのちはこころ
こころはあたたかい
あたたかい心はのこころ
いのちがだいじ
こころをもちわらわい
もったいなくからいばい
おしなになるため
いのちはいいこと
こころは友達
いのちはいいのちになる

蔵王マウンテンファーム山川
牧場（山形県）で牧場体験
をした山形県天童市立天童
南部小学校2年生のすず
きはるかさんから、牧場主の
山川喜一さんに届いた「いの
ち」の詩です。



ひとやすみ



小学校高学年

乳牛の糞尿を生かした「循環型農業」で 食料生産を支える酪農家に触れる

北海道札幌市立伏見小学校5年生／むらかみ牧場（北海道）

「牛はかわいいけど、仕事は私にはできない。仕事
たいへんだからこそ、いい牛からおいしい牛乳ができる。」

牛は体だけで
はなく、ふん
によっても食
量もビック。牧
場の人たちの
努力がこの牛
たちの健康に
つながり、牛た
ちの住みやす
い所を作って

くのである」。乳牛の学習を通して新聞にまどめた子
どもの感想です。北海道は日本有数の食料基地として位置
付けられており、全国一の酪農王国でもあります。子ど
もたちも給食や日常生活の中で毎日のように牛乳や乳
製品と親しんでいます。酪農生産と結びつけて考える
機会は少ないのが実態です。その理由として、子どもた
ちの生活環境が、あまりにも牧場とかけ離れていること
と、物質的な豊かさのなかで、牛乳が当たり前のよう

手に入ることが考えられます。そこで伏見小学校では、
酪農体験を通して酪農家の営みに触れ、「おいしく、安
全な牛乳を生産する秘密」を知るため、むらかみ牧場で
体験学習を行うことになりました。

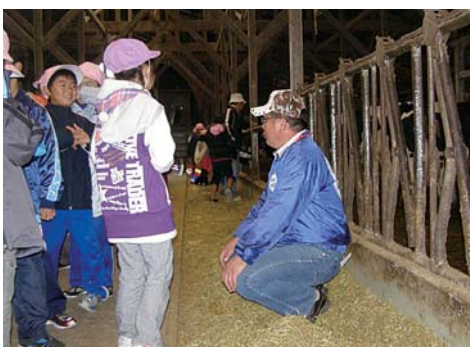
子どもたちにはまず、乳牛が大量の糞尿を排泄する事
実を飼育しているペットの世話をする生活体験と結びつ
けて考えさせました。それにより、酪農家が健康な乳牛を
育てるためには、糞尿の処理や敷料の衛生を保つことが大
切な仕事であることに気付かせました。さらに糞尿は堆
肥化して牧草地に蒔き、そこで育った牧草を乳牛が食べ
るというように、循環させていることを加え、酪農家の仕
事の努力や工夫につなげていきました。

酪農体験では、「くさい」と鼻をつまむ子どもたちに
むらかみ牧場の村上さんは、「どんなにおい？」とにお
いのもとが何かを考えさせました。「かつおぶし」「しよ
ゆ」などの子どもたちの発言を村上さんは上手に拾い上
げ、「食物残さが乳牛の餌になっている」ことを伝えま
した。乳牛は草も含め人間が食べられないものを食べて
ミルクにかえてくれる、リサイクルやエコについて話を
広げ、それを乳牛の糞の話に発展させました。「みんな
がくさいと言う糞も、堆肥となって畑に蒔かれ、牧草が育
つ肥料になる。乳牛はミルクを出すこと以外にもいろい
ろな働きをしている」という村上さんの話に生産者だか
らこそ説得力があり、糞尿と堆肥が子どもたちの思考
の中でつながっていきました。

体験後の学習では、「邪魔になる糞尿も生かして、土
や水道管を汚さないようにしながら安全な牛乳を生産
している村上さんはすごい」「糞尿を役立てる方法を考
え、堆肥化という考え方にたどり着ける村上さんを尊敬
する」など、子どもたちの心に大きなインパクトを与え
ました。酪農体験を通して、食べ物裏側にある生産者
の営みや思い、願いを考えることで、「無駄を出さない」
「マイナスからプラスに発想を転換する」等、生きていく
上でのものの見方や考え方を学ぶことができました。



牛舎で鼻をつまむ子どもたち



えさについて村上さんから話を聞く

乳牛と酪農家の存在が、 10年後にも記憶に残る

福岡県福岡市立舞松原小学校5年生／ヨコオ（現ミルン）牧場（佐賀県）

我を忘れて乳牛の世話に夢中

石田先生が酪農教育ファーム活動と出会ったのは約20年前、舞松原小学校に赴任していただいたことです。当時子どもたちの不登校が社会問題になっていました。「子どもたちの心にあたたかさ」と考えていた石田先生は、乳牛が持つセラピー効果や牧場での自然体験に魅かれました。佐賀県内で酪農を営むヨコオ牧場の横尾さんに相談すると、「いつでも来ていいよ」と返事をもらいました。酪農体験にどのような教育的効果があるのか知るためには自ら体験するしかないと思っただけで石田先生は、朝6時にヨコオ牧場に行き、仕事の手伝いをさせてもらいました。自宅から1時間半の距離を石田先生は何度も通いました。時には3人の自分の子どもも連れて行きました。当時、幼児だった下の2人は、パジャマやバックなど持ち物すべてが牛柄になるほど乳牛の大ファンになりました。石田先生も、気が付くと我を忘れて夢中になって乳牛の世話をしていました。「学校の中にこんな感覚が持てる時間があったほしい」「何かに没頭する時間が子どもたちには必要」であり、そのためには酪農体験は絶好の機会だと、石田先生は身を持って感じました。

教員全員が酪農体験に賛同

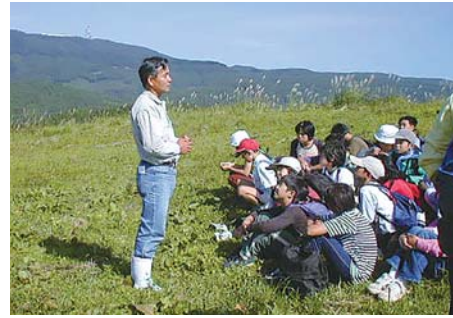
新年度を迎え5年生の担任になった石田先生は、他のクラスの教員にも酪農体験の良さを実感してもらうため、牧場に誘いました。横尾さんも快く引き受けてくださり、搾乳や餌やりをしながら、教員から次々に出てくる疑問に丁寧に答えてくれました。子牛の愛らしさや親牛のダイナミックさに触れ、「子どもたちにもぜひ体験させてあげたい」と教員一同が感じました。

当時の校長先生も、「カビが生えたような教育はするな」が口癖で、新しい取り組みに前向きでした。不登校ミルクのピンをぐいぐいひっぱりました。私も力を入れました。でも子牛にどんどんひっぱられました。まるで子牛と綱引きしているみたいでした。「牧場の自然がとてもきれいでした。ぼくの好きなカエルもいました。目を閉じると鳥の声と風の音しか聞こえませんが、自然が豊かでとてもいい場所でした。ぼくはあの風景がわすれられません」と素直な言葉が綴られていました。

酪農体験の魅力の一つは乳牛にあります。それと同じくらい魅力的なのが酪農家の存在だと石田先生は言います。佐賀弁で語る横尾さんの言葉に、あたたかさや心地よさを感じ、話の面白さに引き込まれていきました。「酪農という言葉が子どもたちの記憶に残れば本望」と語る横尾さん。そのおらかさに子どもたちを触れさせることも、体験させたかった理由のひとつです。乳が搾れなくなった乳牛は処分されてしまいますが、それゆえに「頑張ってくれた乳牛は少しでも長生きさせたい」と横尾さんは考えます。その生き方に石田先生は横尾さんの人間力を感じています。

大人になっても消えない酪農体験の記憶

2回の酪農体験終了後、追わしたいテーマをひとりずつ決め、模造紙1枚にまとめました。「品種改良」をテ



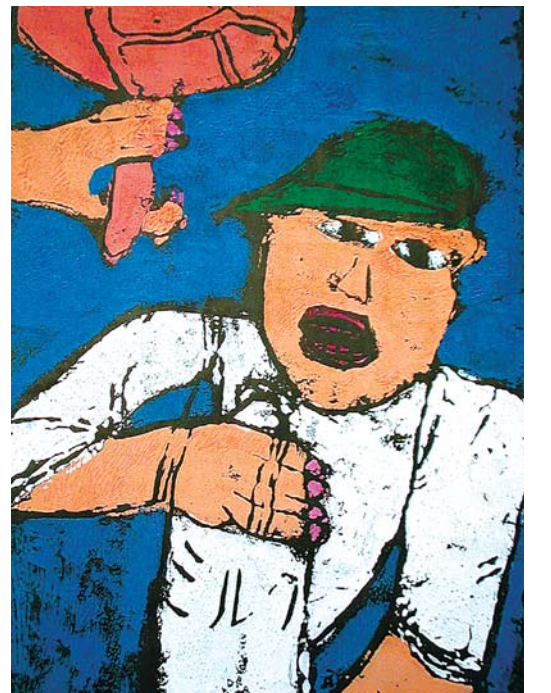
背振山を背景に酪農を語る



人工授精の説明をする



子牛の体験で「心がなめらかになる」と表現する



乳搾り体験を絵画に

にも心を痛め、「行きがいがある学校、居がいがある学級」を学校経営の方針とし、「明日が待ち遠しくなる授業づくり」を研究主題としました。ちょうど総合的な学習の時間も始まった頃で教育計画に位置付けやすく、酪農体験をもとに理科や社会科、図工、道徳の時間とも関連させて活動をしました。

酪農体験は2回実施しましたが、1回目から子どもたちは乳牛を恐がることなく、牧場に着くなり、「先生、牛、牛、いっぱいいる。すごい！」と歓声を上げました。「石田先生のクラスはおかしな笑い（笑）」と横尾さんに言われるほど積極的に乳牛と関わりました。子牛を散歩させながら競争して、子牛がいなくなったこともありましたが、それを横尾さんに報告すると、「探してこんね」と言われ、大粒の汗を流しながら真剣に探す子どもたちの姿がありました。どの子どもからも笑顔が溢れ、解放感で満たされていきました。

あたたかい横尾さんの言葉に癒される

体験後、子どもたちの感想には、「はじめての体験でいっぱいでした。1日中ドキドキしていました。牛は性格や顔つきもいろいろあって人間みたいでした」「子牛がマに学習を進めたIさんは、人間の手による乳牛の改良とそれのおかげで食料生産が成り立っていることを調べました。体験学習を通して、経済動物としての乳牛の存在を深く考えるようになりました。1回目の体験で人工授精の話聞いたOさんは、理科でメダカの学習をしていたことから、「授精は自然に行われるはずなのに」と疑問を持ちました。その疑問を横尾さんにつづけ、人工授精の道具や冷凍精子の写真などもまとめました。体験学習で乳牛が大好きになったI君は、「体重の重い牛がゴロゴロしていたら弱って動けなくなるのでは」と乳牛の運動不足を心配しました。その答えは本やインターネットでは見つからず、I君は夏休みに牧場のファームステイに参加し、現場で働く人たちに話を聞きました。その結果、飼育方法の違いで乳牛の寿命に違いが出ることを突き止めました。

酪農体験から得た気付きや感動、知識や知恵は、ひとりひとりの子どもがそれぞれの感性で受け取り、それぞれ違う興味や関心となって広がっていきました。「何かを見つけ、没頭する時間を持たせたい」と考えていた石田先生にとって、酪農体験はまさにそれに相応しいものでした。酪農体験を通して子どもたちは多くのことに気付きました。それは子どもたちだけではなく石田先生にも気付きをもたらしました。それは、「教科書に載っている知識の裏には、そのことを仕事にしている人がいる。人を介在させることで子どもたちの心に響き、世の中があたたかく輝いて見えてくる」ということでした。石田先生はそのことを横尾さんから学びました。一方、「酪農という言葉が記憶に」と語っていた横尾さんも、その思いが実現しました。20年前にヨコオ牧場で体験した子どもたちが、大学生になった10年前の話です。JR香椎駅にある商店街に、ヨコオ牧場の牛乳やアイスクリームなどが置いてある店がありました。子どもたちがそこに来て、「ヨコオ牧場の牛乳だ」と懐かしそうに飲んだそうです。大人になっても消えない記憶に、「酪農教育ファーム活動は、酪農理解につながる」と横尾さんは確信を持っています。

酪農家の生き方や考え方から 人生観や哲学を学ぶ

筑波大学付属中学校の修学旅行の5つのコースの中で酪農作業を行う「勤労体験コース」は、毎年希望者が多く、一部の生徒に他のコースに代わってもらうこともあるほどです。生徒たちの強い要望に支えられて、30年間続いてきました。同校は国立大学附属校であり、教育実習校としての役割を担っています。体験学習や共同学習を中心とした修学旅行のルーツは明治時代にまで遡り、修学旅行発祥の学校とも言われています。

勤労体験コースを担当する多田先生は、体験後の生徒たちの変化から、酪農には生きていく上で大切なことを学べる価値があると感じています。

「このコースが30年続いているのは生徒たちの要望もありますが、酪農家の方々の協力があったこそです。生徒は7〜8名で班になり、5戸の牧場に分散して受け入れてもらっています。日常の作業を手伝わせてもらいますので、酪農家にとっては作業効率が下がり、随分負担をかけていると思います。それでも一生涯懸命な面をみてもらい、酪農を通じて仕事をすることの知恵や工夫、心構えを教えてもらっています。勤労体験が他のコースと違う点は、牧場の作業がこの修学旅行でしかできない体験であるということです。獣医や研究者など将来酪農に近い世界に進学を考えている生徒もわずかながらいますが、そうではない生徒がほとんどです。このコースを選んだ生徒は、酪農家の生き方や考え方を通じて人生観や哲学などを学べることに意味を見出しているのだと思います。」

多田先生の言葉通り、「酪農家にならなければ、1日中酪農をすることは不可能だ」「食べものの大切さやありがたさ、いのちの重さや動物を育てることの大変さを学びたいと思った」と、生徒たちは志望動機を語っていました。

体験したからこそ獲得できた言葉

多田先生が事前に酪農家をお願いしたことは、「酪農家の日常の作業を経験させてほしい」とこと、「仕事は酪農に限らず、草取りでも何でもさせてほしい」ということでした。

最初は何をしていたかわからずぎこちなかった生徒たちも、半日も経つと教えてもらったことを自分なりに工夫し、できることを自分で見つけながら積極的に関われるようになりました。

「慣れない環境や場所に身を置くことは、生徒たちにとっては心細い経験です。生き物が相手なだけにやりたくてもやらせてもらえないこともあれば、やるのがなければそのままということもあります。そのひどつひどの出来事が、生徒たちにいろいろなことを感じさせます。母牛が立てなくなりながらも出産するシーンや雄の子牛が出荷されるシーンなど、予期せぬ出来事に遭遇することもあります。生徒たちにとってはわずか2日間という短い時間ですが、生きる上で大切なメッセージを受け取りかけがえのない時間になったと思います。」

生徒たちはそれぞれの牧場で異なる作業をし、自分が掲げたテーマに沿って酪農家に質問しながら作業を繰り返しました。どの牧場でも、現場で起こる出来事は予想を超えるものでした。実体験をしたからこそ得た気付きがありました。生徒たちのレポートには、「当たり前前だと思っていたことが当たり前前ではないことに改めて気づいた」「いのちを扱っている人が一番いのちを大切に考えている」「楽しいことには苦勞がある」「感謝の気持ちを持っているからこそおいしい牛乳が作れる」「仕事は言われたことをやるのではなく、頭を使い考えるのが知恵」等の言葉があり、今後の人生に大きな意味を与えたことが伺えました。



三浦牧場の三浦順子さん（前列左から3人目）を囲んで

中学校

「知識」を「知恵」に 勤労体験がもたらしたかけがえのない気付き

筑波大学附属中学校3年生 / 松下牧場・三浦牧場・他3戸（静岡県）



諸感覚を伝えるように工夫

酪農教育ファームファシリテーターの中島先生は、大阪府立高槻支援学校の高等部3年生の担任です。週1時間の選択授業で園芸を受け持ち季節の植物を栽培してきましたが、その年最後の授業で酪農を取り入れたいと思いました。それは、「食べ物のつながりを牛乳につなげ、牛乳がどのように作られているのか知ってほしい。卒業しても牛乳を飲んでほしい」という思いからでした。卒業が近い2月、中島先生の思いに応えた近畿地域のファシリテーター7名は、生徒たちに出前授業を行いました。体験内容は酪農の仕事や牛乳ができるまでの話、搾乳体験とバター作り体験などでしたが、いず

特別支援

次々と繰り広げられる展開に 高揚感が高まる

大阪府立高槻支援学校／出前授業

れも諸感覚をフルに使えるようにプログラムを工夫しました。それは事前に中島先生から、「言葉だけでは伝わらないので体験することで実感させてほしい」という要望があったからです。例えば、乳牛のブラシや子牛の哺乳瓶は大きさを形の違いが確認できるように人間用のものも準備しました。

また、乳牛が1日に食べる餌の量も、30kgの牧草と25kgの配合飼料を準備し、生徒たちに持たせて重さを実感させました。搾乳体験では模型の乳牛を使用しましたが、なるべく本物に近づけるためお湯にポーションミルクを混ぜて乳白色にし、乳房から出てくるミルクのあたたかさが感じられるようにしました。

生徒たちも次々と繰り広げられる展開にグイグイ引き込まれていきました。赤ちゃんを産んで初めてミルクが出るという話では、「お腹の中で赤ちゃんが大きくなるど、胃は小さくなるの?」と素朴な質問が投げかけられていました。バター作り体験では、先生に手伝ってもら

いながら全員がバターを完成させました。容器からバターミルクを取り除くときに、「飲まないの?もったいない」とつぶやく生徒もいました。

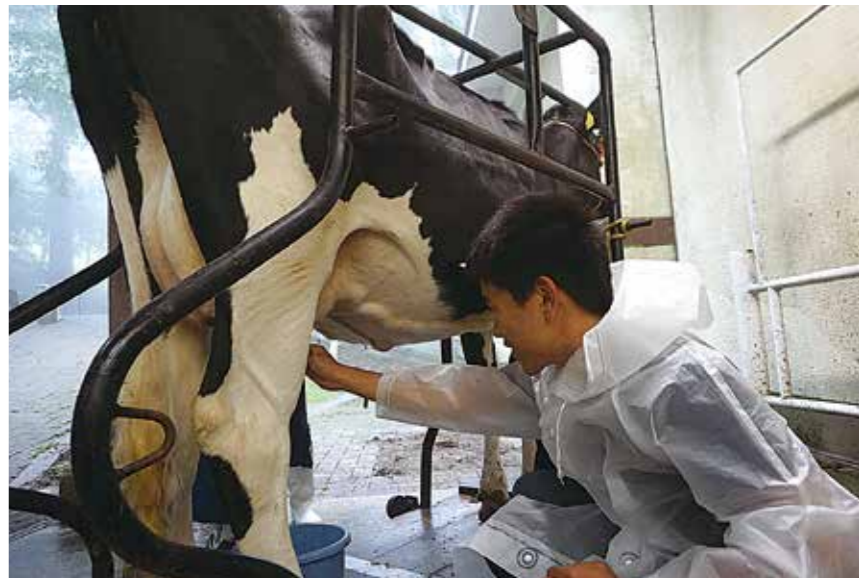
牛乳を大切にできるようできたど自負

終了後、中島先生は授業のスムーズな進行と予定していた体験が時間内にできたことに驚きました。「生徒たちの期待感やモチベーションがどんどん高まっていくのがわかりました。それは、酪農家から本物をたくさん見せてもらい、教えてもらったことが大きかったと思います。普段は、できたことをひとひとしか言えない生徒が、3つも4つも言うことができ、授業後、嬉しそうに報告にきました。」

生徒たちの反応に手応えを感じた中島先生は、2年目も高校3年生で継続を考えていました。ところが小学部や中学部の先生方も興味を示し、2年目、3年目はほぼ全校で実施することになりました。保護者や大阪府内の他の特別支援学校の栄養教諭も参加し、活動の幅も広がっていきました。それに合わせて高等部の目的も深まり、2年目は、「乳牛の食べ物やミルクが出る仕組み」から酪農を理解し、3年目は、「酪農の仕事」を知ることでキャリア教育につなげていきました。

ファシリテーターも体験を重ねることに生徒の反応がわかるようになりました。3年間、生徒たちと関わった元酪農家の花房さん(兵庫県)は、「時間が間延びしたり、興味から外れてしまうと一瞬で集中力が途切れてしまいます。そのため、まばたきすると見逃してしまおうと思えるくらい、普段の1.5倍くらいのボリュームで話や資料を準備しました。言葉だけで伝えるのは難しいと聞き最初は戸惑いましたが、伝え方を工夫することで伝わりやすさを実感し、ファシリテーターにどうても学びが多い体験になりました」と感想を述べました。

3年間の出前授業も終わり、最後、高校1年で体験した生徒たちは翌年、宿泊学習の一環で神戸市立六甲山牧場に行き、本物の乳牛で搾乳体験をしました。「生徒が怖がって大声を出し、乳牛もびっくりするのではないかと懸念していましたが、怖がるどころか全員



六甲山牧場で搾乳体験

1日目は、	カワサキワ
ルドに行きまし	た。
イクにのて、	ゲームを
しました。	六甲山牧場
に行つて、	ちぢしぼりを
しました。	次に、アイ
スクリームを作	って、食
べました。	おいしがっ
たです。	

体験後、生徒の感想



中島先生のあいさつ



子牛と人間の哺乳瓶を比較し説明する花房さん



牧草を抱えて30kgの重さを実感



ミルカーで子牛の吸引力を感じる

手でじっくりと触れ、感じることで 母牛の乳と牛乳がつながる

筑波大学附属視覚特別支援学校／出前授業

手から伝わる温もりから感じる感性

当日は、子牛の哺乳、乳搾り、牧場の仕事と3つのブラスを学年ごとに体験していただきました。各学年とも少人数だったため、酪農家に手を携えられたり抱きかかえられながら親牛や子牛をゆっくりと触り、手から伝わる温もりをじっくりと感じていました。牧場の仕事では、数種類の乳牛の餌に鼻を近づけてにおいをかいでいました。

体験の様子を見ながら高瀬先生がじっくりとしたことは、子どもたちが発する言葉や態度の変化でした。5年生の男児は子牛のあたたかさに触れたとき、「僕たちがこんなにあたたかかったら、それは風邪をひいて熱が出ているとき」と言いました。それを聞いた酪農家は、普通はなかなか行き着かない答えを、触っただけでここまでストレートに感じる感性に驚いていました。一方、動物に全く触ることができなかった2年生の女児は、気が付いたら子牛の背中に両手を置いていました。その姿に高瀬先生は目を疑い、

付きました。

フィギュアで乳牛の全体像を把握

筑波大学附属視覚特別支援学校の栄養教諭である高瀬先生は、埼玉県のある学校で実施された「わくわくモーモースクール」の見学に行き、乳牛を連れ出した出前授業の存在を知りました。日常生活において視覚から得る情報は8割以上と言われていますが、そこに難しさがある子どもたちにとって、乳牛の大きさやあたたかさなど実物に触れる体験は何より貴重です。本物の乳牛に触れ、乳のあたたかさを感じながら食べ物の原点を知り、食べ物とのつながりを

乳牛が与える絶対的な安心感を感じました。

子牛にもおっぱいが4つあることを確認

体験後、記憶が新しいうちに気が付いたことや感じたことを点字で書きおこしたところ、1年生の女児が次のような感想を寄せました。

「子うしのコーナーに行ったとき、子うしがとてもあたたかいかおもったのとふわふわのけがはえていてとてもやわらかいとおもいました。どくに名まえをおぼえたのは3か月のジャッキーちゃんです。ジャッキーちゃんはうしろ足どうしろ足のあいだにもうおっぱいがよつつもありません」

子どもたちは子牛のおっぱいが確認できるほど手でじっくりと子牛を触り、手の感触を通していろいろなことを学ぼうとしていたことを改めて感じました。

「わくわくモーモースクール」の実践が今後どのように発展していくかはわかりません。しかしながら、少なくとも子牛と同じ飲み物を飲んでいることを知ったことで乳牛を身近に感じ、食べ物と自分たちがつながっていることに気付くきっかけになったことを高瀬先生は確信しています。



3体のフィギュアで事前学習





バルク内に集まったミルクの量に驚く



搾乳前の前搾りでミルクの状態を確認する



牛舎内の仕事について石田さんよりレクチャーを受ける

不登校

酪農体験で生き方の可能性が広がる

東京シューレ葛飾中学校／石田牧場（神奈川県）

体験学習のひとつに酪農を取り入れる

東京シューレ葛飾中学校は、葛飾区から校舎や校地を借り入れ、地元の協力も得て平成19年4月に開校した不登校の生徒対象の私立中学校です。日本で不登校の子どもたちが激増するなか、昭和60年に誕生したフリースクール「東京シューレ」を母体としています。文部科学省からも「特別の教育課程編成実施指定校」に認定され、不登校支援をしながら特色ある教育を行う正規の中学校です。授業時間数は一般の中学校より少なめですが、教育課程で定められた9教科に加え体験学習を重視しています。そのひとつとして酪農体験を取り入れたのが、教頭の木村先生です。木村先生は、平成28年に中央酪農会議主催の「教育関係者対象・酪農教育ファーム夏の研修会」に参加し、酪農教育ファーム活動と出会いました。

「夏の研修会の参加者を募集するチラシがファックスで届き、それを見て研修会に参加しました。開催場所が伊勢原市にある石田牧場と知り、20年近く神奈川県に住んでいたこともあり懐かしさと親しみを持ったのが参加動機です。また、小さい頃から動物が好きだったことも参加のきっかけになりました。週1回、『プロジェクト』という授業が時間割に組み込まれていますが、そこでも動物と関わる『動物プロジェクト』を担当しています。参加前は酪農教育ファーム活動については全く知らなかったため、『動物プロジェクト』で牧場体験を取り入れられるかもしれないという気軽な気持ちでした」。

ほしいと思いました。もうひとつは、仕事に向かう石田さんの柔軟な姿勢でした。石田さんは酪農をやり始めた当初は、海外や北海道の大きな牧場と比べ自分の牧場の狭さを嘆き、デメリットばかりに気を取られていたのですが、見事に発想を転換されました。都市型酪農の強みを活かし地元の農家とつながりジェラートを販売するなど、足もとからどんどん事業を広げていく石田さんの行動力とバイタリティーに圧倒されました」。

見方を変えればデメリットもメリットになるという石田さんの考え方を生徒たちが自分のこととして置き換え、不登校こそ強みにしてほしいと木村先生は言います。でもすればネガティブにイメージしがちな不登校をポジティブに捉え、「行けなくなった自分を受け入れ、そこからどう自分を育んでいくのか。それが大事だということ」を、牧場体験で木村先生は改めて感じました。

牧場で4名が職場体験

動物好きの木村先生は、子どもと動物の関わりに強い関心を持っています。

「不登校になって動物を飼い始め、癒されるケースもたくさん見てきました。動物を介すると活動がスムーズになるのは、動物が飼い主を条件付きではなくありのままに受け入れてくれるからだと思います。乳牛と接したときもその感覚はありましたが、乳搾りのとき伝えられた石田さんの言葉で大切なことを教えられました。それは搾る前は『今から搾るよ』、終わったなら『ありがとう』と乳牛に声をかけてくださいという言葉でした。人間の側からも乳牛に気持ちよくなることを、より深く、あたたかい交流が生まれることを感じました」。

研修会を終え酪農に感銘を受けた木村先生は、早速石田さんに生徒の職場体験を打診したところ了承をいただき、11月に女子、2月に男子が2名ずつ牛舎掃除や搾乳などを体験しました。

「生徒たちにとって酪農は遠い世界で、残念ながら相当意識しないと身近な存在になりません。だからこそ身を



乳牛が食べやすいように餌を寄せる

見方を変えれば デメリットもメリットに変わる

研修会に参加した木村先生は、酪農体験や石田さんの話に魅き込まれていきました。

「魅力を感じたことのひとつは、酪農が持つ仕事そのものでした。生徒たちの身近にある仕事の多くが、大量生産・大量消費・大量廃棄で成り立ち、価値観の基準は大方が損得勘定です。ところが酪農はそれだけではありません。乳牛の育て方で牛乳の良し悪しが決まるため、おいしい牛乳を生産するために酪農家は日々工夫し、努力を惜しみません。いのちそのものに触れる職業であるがゆえに、仕事のあり方そのものが生き方にもつながります。仕事は損か得かだけでは判断できない、やりがいや生きがいがあることを生徒たちが知るきっかけにして持って体験してほしいと思いました。動物に関わる仕事を希望している男子生徒は体験後、『悩みが増えた』と言って来ましたが、なぜなら、酪農を知ったことで仕事の選択肢がまたひとつ増えたからだそうです。もうひとつの男子生徒は、『バルクには1000ℓのミルクが入っていた。毎日何千人分の食生活を支えているすばらしい仕事』と感想を述べました」。

不登校は「いのちの問題」

大阪府出身の木村先生は就職前に東京に遊びに来たとき、伯父・伯母からたまたま「東京シューレ」の新聞記事を見せられました。記事に強い関心を抱いた木村先生は、決まっていた養護施設就職を断り上京しました。10ヶ月間は「東京シューレ」のスタッフとして働き、その後、正職員になりました。

「不登校はよくないという風潮が社会ではまだまだありますが、私は、『不登校は』学校と本人の不具合が生じただけ』と思っています。平成28年9月に文部科学省から出された『不登校児童生徒への支援の在り方について』の通知に、『不登校を問題行動として判断してはいけません』という文言が記載され、時代も少しずつ変化して来たと感じています。それでもこの学校に入るとき生徒たちは傷つき、死にたくなくなるくらいに思っています。学校に行けなかっただけでなぜここまで追い込まれるのだらうと考えた時、不登校は『いのちの問題』でもあると思います。いのちの先には食があり、農業が必ずつながります。いのちの問題を解決するためにも農業や酪農を生徒たちの前に引き寄せ、日々の生活に実感が伴うように仕組みづくりを始めたいですね」。

「あれダメこれダメ」と否定するのではなく、「あれもこれもあり」と受容することこそ豊かで成熟した社会を実現すると木村先生は考えます。そして、その一端を酪農が担うことを期待しています。なぜなら酪農家はもの言わぬ乳牛と暮らし、すべてが予定調和ではない毎日を受容しながら生きる人たちだからです。

はじける笑顔、 乳牛といっしょにキラキラの一日

宮城県石巻市立橋浦小学校（当時）／東日本大震災復興支援
熊本市立帯山西小学校／熊本地震復興支援



子牛のかわいらしさに思わず抱きつく



酪農家の声かけに安心の笑顔



「東日本大震災」 酪農体験で心を癒す

平成23年3月に発生した東日本大震災では、たくさんの尊いものが失われました。地震や津波の被害により不安や恐怖で深く傷ついた子どもたちの心を癒したいと全国から酪農家が集まり、被災地の石巻市（宮城県）にある橋浦小学校（当時）で酪農体験を行いました。子どもたちはホルスタインとジャージーの親牛と子牛、うさぎ、山羊、羊の小動物とたっぷりふれあい、動物たちのかわいらしさに心を解き放ちました。全国から駆けつけた酪農家が各学年の担当になり、子どもたちにやさしく寄り添いました。会場は終始なごやかな雰囲気になりました。

「心の癒し」は言葉ではよく聞きますが、それを酪農体験で実現するために、酪農家は2つのポイントを意識しました。ひとつは抵抗感の少ない子牛からふれあい、少しずつ慣れたところで親牛と出会うことです。もうひとつは子どもたちが乳牛と仲良くなれるように乳牛とふれあう時間を大切に、子どもたちが興味、関心を持つことに応えていくようにしました。

体験当日、残暑の日差しが照りつける中、校長先生の「今日は先生も、みんなと同じように無邪気に遊びます」という挨拶でスタートしました。最初は緊張して表情が硬かった子どもたちも、子牛の愛らしさや酪農家のおおらかさに安心感を覚え、会場は一瞬にしてなごやかな雰囲気になりました。2年生を担当した清水ほづみさん（愛知県酪農家）は、「子牛にジャンプするときは『やりたくない』と言っていた子どもたちも、お散歩で子牛が歩いてくれたことで緊張感が解けたようでした」と語りました。同じく2年生を担当した佐久間純一さん（宮城県酪農家）は、「体験の空き時間は、子どもたちが興味あるブースに移動しました。乳牛に触ったり、うさぎを抱いたり、羊の背中に乗りたいという子どもには乗せてあげて、できるだけ希望を叶え

るようにしました」と言いました。一方、5年生を担当した牧野大地さん（千葉県酪農家）は、「体験中に被災の話もしてくれましたが、あれだけの被害に遭ったにも関わらず、子どもたちの話し方には前に進もうとする力強さと今を懸命に生きる喜びが感じられ、こちらが元気をもらいました」と感想を述べました。

全校児童170名という大人数だったため時間のやりくりが心配されましたが、各学年ともたっぷり乳牛たちとふれあう時間を持つことができました。子どもたちは酪農家ともすっかり打ち解け、給食も一緒に食べました。給食には、酪農家と保護者が準備した、宮城県の名物芋煮に牛乳を加えた「ミルク芋煮」も添えられました。

体験終了後は、酪農家と先生方で懇談会を開き一日を振り返りました。先生方からは子どもたちが変化する様子を驚くとともに、「子どもたちの変わる姿を見て、癒された気持ちになった」「生まれ変わったら乳牛になりたい」という子どもがいた。「2学期に入り登校を渋る子どもがいたが、今日は乳牛を通して友達と楽しく過ごしていた」「学校生活を送れるエネルギーをもらった」等、思い思いの感想が寄せられました。

一方、ジャージー牛を連れてきた安原栄蔵さん（青森県酪農家）は、「全国の酪農家がひとつの場所で酪農体験を行うのは初めてのことでだったので共通の意識が持てるかどうか不安でしたが、体験が始まるとそれが杞憂であることがわかりました。子どもたちだけでなく先生方も被災され、厳しい状況を抱えていらっしゃると思うので、酪農体験でやわらいだ気持ちになってもらえたら実施した甲斐がありました」。ホルスタイン牛を連れてきた庄司善信さん（宮城県酪農家）は、「子どもたちの笑顔に救われました。できることは精一杯やりたいと思いました。酪農という仕事で子どもたちに何らかの影響を与え、社会貢献の一端を担えたらと思います」とコメントしました。

「熊本地震」 乳房のあたたかさ、 やわらかさに生きていることを実感

平成28年4月に発生した熊本地震で被災した子どもたちに、「モーモースクール」を実施するため、九州を中心に全国から30名の酪農家が集まりました。実施校は帯山西小学校で、1年生128名と近隣の園児が搾乳や子牛の哺乳、バター作り体験をはじめモルモットやうさぎ、パンダマウスなど小動物とのふれあいも行いました。動物とたっぷりふれあう一日に、子どもたちは満面の笑顔を見せていました。

搾乳体験に先立ち、乳牛の模型で乳搾りの練習をしました。模型の乳房の冷たくて固い感触に比べ、本物の乳牛の乳房からはあたたかさややわらかさが伝わり、生きていることをリアルに感じる事ができました。担当の教頭先生によると、「子どもたちは、自分たちの生活圏内に乳牛が来るのが驚きだったようです。この日が来るのが待ち遠しかったようで、指折り数えて待っていました」と全国から集まった酪農家に心から感謝していました。



体験後、酪農家に宛てた手紙（熊本）

事例から見取る酪農体験の学び

13事例を通して見取れる酪農体験における教育的効果について、「酪農教育ファーム活動20年の節目の取組に係る検討会議」の参集者である2人の教育関係者に講評をいただきました。

中学校、特別支援学校、視覚支援学校、不登校、復興支援における教育的効果

講評：日本体育大学児童スポーツ教育学部 教授／角屋重樹

筑波大学附属中学校、高槻支援学校、筑波大学附属視覚支援学校、東京シューレ、復興支援（東北・熊本）という5つの事例から酪農体験における教育的効果を導き出すためには、体験とそれに潜在する教育的価値を引き出す教師の手立てを顕在化する必要があります。そこで5事例を、体験の種類と教師の手立てという視点で整理しました。その結果を次表に示します。

事例	体験の種類	教師の手立て
筑波大学附属中学校	酪農家の作業体験	生徒が日常の全ての作業を体験するようにする。
大阪府高槻市立特別支援学校	出前授業による、模擬搾乳体験、バター作りなど	①乳牛のブラシや子牛の哺乳瓶を人間のそれらと対比できるようにする。 ②搾乳体験で乳のあたたかさを感じるようにする。
筑波大学附属視覚支援学校	本物の親牛や子牛に触れる	諸感覚を通して本物の親牛や子牛に直接触れ、その温もりを感じるようにする。
東京シューレ	酪農家の乳牛の育て方を実感	酪農家の乳牛の育て方や日々の工夫、努力を感じるようにする。
復興支援（東北・熊本）	母牛、子牛とのふれあい、模擬搾乳体験	模型の乳牛と本物の搾乳体験を比較できるようにする。

以上5事例から言えることを整理すると、酪農体験は単なる体験ではなく、教師がその活動に潜在する価値、例えば、乳牛のあたたかさや大きさなどを見出し、それを子どもが感じる手立てを教師が工夫することにより、酪農体験固有の教育的な効果が期待できると言えます。

幼稚園、小学校低学年・中学年・高学年における教育的効果

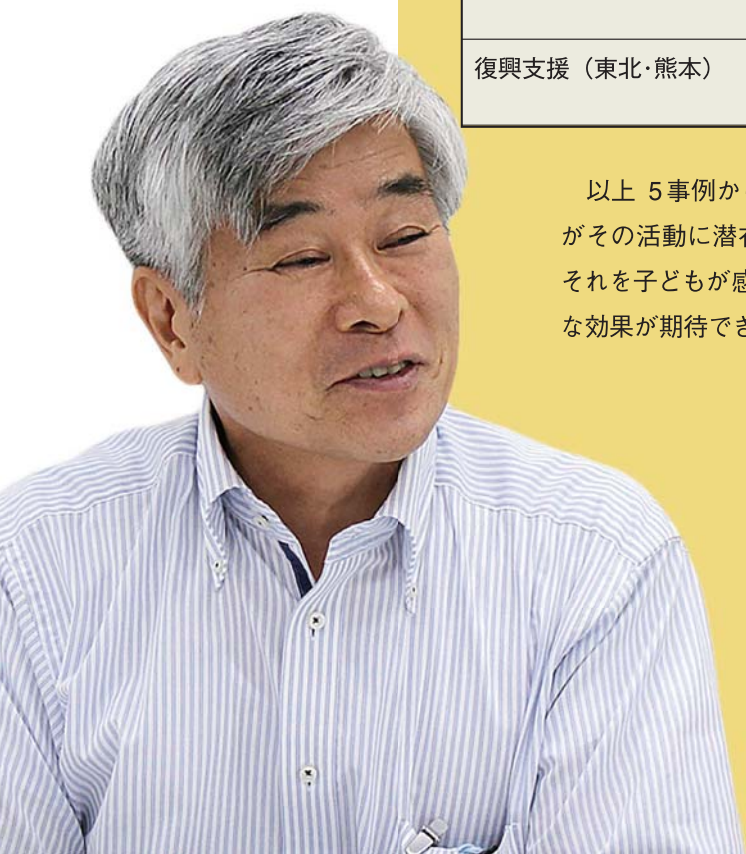
講評：日本酪農教育ファーム研究会 会長／國分重隆

幼稚園、小学校低・中・高学年に共通する教育的効果として3点が考えられます。

- ① 酪農体験の感動が感性を磨き、心を豊かにする。
- ② 酪農体験がいのちの重みを実感させ、自分も他人も大切に思う心を育てる。
- ③ 酪農体験が食の知識と食を大切に作る姿勢を育て、学びの質を高める。

次に上記以外にも見られた7事例について、各々の特徴的な教育的効果を挙げます。

1. 鶴巻幼稚園と榎本牧場【二度の体験と出産に立ち会えたこと、酪農家の話の効果】
出産に立ち会えた体験と榎本さんの語る「乳牛の定め」が、幼稚園年長児の「食への感謝の気持ち」を本物にし、子牛の世話ができた自信が自己肯定感を育てる。
2. 和田小学校と藤井牧場【教師の課題意識と酪農家の理解による継続活動の効果】
牧場で乳牛の世話を継続して行う経験が、1年生児童にも協力して世話をする大切さを実感させ、いのちあるものへの責任感と思いやりの気持ち、主体的に考え行動する力を育てる。
3. 東戸山小学校と吉田牧場【心を揺さぶる酪農家の話と諸感覚をフルに使った体験の効果】
牧場での体験がもたらす感動や乳牛の母子の前で酪農家が優しく語る母子分離の話が、いのちの深い気付きをもたらし、1年生児童の語彙と感情を伴う言語表現を豊かにする。
4. 小垣江東小学校と清水牧場【学校と牧場の絆が可能にした17年続く子牛飼育の効果】
地域との連携を大切にしたいのちの教育として、「学校での雌の子牛の飼育（2ヶ月間）」に酪農家が全面協力することにより、4年生児童が自分の言葉でいのちの尊さを語れるようになる。
5. 野間小学校と鮫島牧場【教師のカリキュラム構成への熱意と酪農体験の位置付けの効果】
酪農体験や酪農家との関わりが5年生児童の社会科の主体的な学びを促し、牛乳生産を牧場と牛乳工場の一連の流れで捉えさせ、日本農業の素晴らしさや課題の学びを深める。
6. 伏見小学校とむらかみ牧場【「循環型の農業」を実現する酪農家の生き方の効果】
牧場での体験と、糞尿の堆肥化や牛床の衛生管理などリサイクルやエコ、安全に関する酪農家の努力や工夫の話が、5年生児童の食生活を自ら真剣に見直そうとする思いを高める。
7. 舞松原小学校とココオ牧場【乳牛との関わり、牧場の環境、酪農家の人間性の効果】
子牛とのふれあいや牧場の自然が5年生児童の心に解放感を与え、乳牛を思う酪農家の人間性に触れた感動や酪農体験から得た知識や知恵が個々の学びに広がりをもたせる。





1回目の体験の感想を持って松岡さんを訪ね、そこではじめて真治の話の切り出したところ、「できることがあるのだったら協力したい」と言ってもらった。2回目の体験では、人工授精師を呼んで種付けを見せてもらうことになった。その時、松岡さんから、「牧場でいろんな関わりを持つと、乳牛のいのちが見えてくるようになる。いのちを探してほしい」という話があった。「いのちを探す」。その言葉は不思議と子どもたちの心に引っかかった。

2回の体験で子どもたちの興味はますます牧場に向かい、下校後、松岡さんの仕事を手伝う子どもも出てくるようになった。その中に真治もいた。牧場が子どもたちにとって居心地のよい場所になるとも、いつしか真治も友達と一緒に行動するようになっていった。夏休みに入ってもその様子は変わらなかった。真治はたとえひとりでも牧場に行き、松岡さんの仕事を手伝った。夏休みが明けて久しぶりに真治に会った吉永先生は、随分たくましくなったことを感じた。それを証明するかのようである日、真治はクラスの前でいじめにあっていた頃のことを話しはじめた。自分が履いたスリッパを「きかない」と言って、靴を履いたままでスリッパを履

かれたことが一番嫌だったと自分の気持ちを正直にみんなに伝えた。夏休みに松岡さんと一緒に仕事をする中で真治は松岡さんの大きな存在を感じ、「嫌なことは嫌だ」とはっきりと伝える勇気を持つことの大切さを教えてもらったのだ。

心に引っかかった酪農家の言葉

2学期になり3回目の体験は松岡さんと相談して、乳牛の爪切りを見せてもらうことになった。爪切りは乳牛の健康を守るためには必要なことだという話を聞いた後、子どもたちは松岡さんからある難問を投げかけられた。「この牧場には、おじさんが酪農をはじめたときから飼っている8歳になる乳牛がいる。乳牛は生活を支えてくれる経済動物だから、ミルクが出なくなる5〜6歳には廃牛にしなければいけない。でも、どうしてもこの乳牛を牧場から出すことができなくて、種付けをしながらいのちを永らえている。みんなだったらどうするかな?」。このシビアな質問にクラスのほとんどが、「餌代がかかるから、出した方がいい」という意見だったが、真治だけは違っていた。「松岡さんが大事にしている乳牛だから、僕だったらどんなことがあっても出さない」。真治の気持ちに松岡さんも応え、「生活を考えると出さないといけないと思いがちでも、わが子を失うほどの辛さがある。真治の言葉はほんとうに嬉しかった」と自分の気持ちを子どもたちに正直に伝えた。松岡さんの言葉は真治にとって生まれて初めて自分の存在を認めてもらう大きな一言となり、クラスでも真治を見る目が確実に変わっていった。

クラスに存在を認められる

3学期になり酪農体験の総まとめの発表会に松岡さんにも来てもらった。発表会では松岡さんから言葉ももらった。「僕は、酪農という仕事は大した仕事ではないと思っていたけれど、君たちをこんなにも変えてくれる仕事だと知り、誇りに思うようになった」。自分たちだけではなく松岡さんの気持ちさえも変えたことを知り、その言葉は小学生を終える子どもたちにとって最高の言葉となった。

その後、真治は中学校卒業と同時に親元を離れ水産高校に進学した。アルバイトで寮費を払いながら高校生活を送り、3年生の12月、愛知県の商品会社に就職が決まった。高校を卒業し愛知に向かうとき、真治は吉永先生に「6年生のときに吉永先生に出会い、松岡さんに支えてもらい、二人にずっと見守ってもらったから今の自分がある」としみじみと語った。吉永先生はその言葉を聞き、真治にとって松岡さんとの出会いはやはり人生のターニングポイントだったと感じた。それと同時に、吉永先生にとっても、真治との出会いはその後の人生に大きな影響を与えた出来事だった。目の前で日に日に変わっていく真治の姿に、「自分ももっといろんなことに挑戦していきたい」とたくさんの勇気と前向きな気持ちをもたらしたのだ。

人生を変える出会い

その後、真治は中学校卒業と同時に親元を離れ水産高校に進学した。アルバイトで寮費を払いながら高校生活を送り、3年生の12月、愛知県の商品会社に就職が決まった。高校を卒業し愛知に向かうとき、真治は吉永先生に「6年生のときに吉永先生に出会い、松岡さんに支えてもらい、二人にずっと見守ってもらったから今の自分がある」としみじみと語った。吉永先生はその言葉を聞き、真治にとって松岡さんとの出会いはやはり人生のターニングポイントだったと感じた。それと同時に、吉永先生にとっても、真治との出会いはその後の人生に大きな影響を与えた出来事だった。目の前で日に日に変わっていく真治の姿に、「自分ももっといろんなことに挑戦していきたい」とたくさんの勇気と前向きな気持ちをもたらしたのだ。

松岡さんの気持ちも変化

春の遠足から始まった酪農体験も最後、子牛の出産で一区切りをつけ、2学期の終わりに、「6年

ばやきながら鼻をつまんだ。その光景を見た吉永先生は、「酪農のことを知らないから、『くさい』というのではないだろうか。もしそうだとしたら、酪農のことを知れば『くさい』と言って真治のことをいじめることもなくなるかもしれない」と思った。

早速、吉永先生は、受け入れてくれる牧場探しを始めた。子どもたちが変化するためには、何回も رفتり来たりできる近くの牧場が必要だった。探すうちに5年生のある男子の家が酪農家であることを

彼の成長を支えた、酪農家との出会い

いじめ解決の糸口

熊本県にある菊陽北小学校に赴任した吉永先生は6年生を担当することになり、その少年と出会った。彼の名前は片山真治(仮名)。新学期が始まり教室に入った吉永先生は、真治の机だけがわずかに他の友達と離されていることに気付き、「なんで、こんなおかしいことをするのか!」とクラスの子どもたちを激しく叱った。真治は家庭の状況が不安定

で身の回りを気遣う余裕がなく、「くさい」「きたない」とクラスからいじめを受けていたのだ。そのため真治はいつもひとりぼっちだったが、この日を境に吉永先生に心を開くようになり、朝、吉永先生が学校に来るのをいつも玄関で待つようになった。その真治の健気な姿に、この問題をクラスで何とか解決しなくてはと吉永先生は真剣に考えた。

「松岡さんが乳牛を育てる気持ちに接して、いのちを感じるようになるようになった。僕は、乳牛のいのちが少し見えるようになった」と語った。「乳牛のいのちが見える」。真治の言葉は、2回目の体験のとき松岡さんが語った言葉だった。



吉永公紀氏
熊本県氷川町立竜北東小学校 校長

ソニー科学教育研究会を通じて酪農教育ファーム活動と出会う。その後、赴任先の小学校で酪農体験の実践を重ねる。設立当初より酪農教育ファーム九州地区推進委員会の委員を務め、九州における酪農教育ファーム活動の推進を担う。平成27年2月に設置した酪農教育ファーム専門委員会の委員も務め、認証規程の一部改正に尽力する。

※ この物語は、平成21年に吉永公紀さんに取材した内容に基づいた実話です。